

る政策と支援を施すことにより、様々なタイプの社会主義の平行世界を作り出したのだという。

SFともみなせるクリアーヌのこのような見解は、世界の在り方に関わる無数の選択肢とその無数の選択肢に接触できる場所・手段(「スーパードコンピュータ」)を示していた点において、『グノーシスの樹』で示された宗教理論と符号すると思われる。本書の斬新性は、「思想体」(ideal objects)という概念を用いた点にある。思想体とは人間の全ての思考パターンを含む超次元的な仮定的存在物であり、人間が有する思想は全て思想体に由来する。様々な思想は思想体から二者択一的な選択肢のかたちをとって派生し、これら選択肢の全ては思想体において共時的に存在するとクリアーヌは考えた。歴史上の個々の宗教現象は、思想体が示す選択肢の一つをあらわすことができるのみである。しかし思想体そのものに接触できれば、過去に起ったことから未来に起こることまでを共時的に把握することが可能になるという。この思想体という考え方は、ある命題に関する選択肢の数を強制的に減らそうとする社会や国家に抗するものだといえる。クリアーヌが明らかにしようと試みた思想体としての宗教は、スーパードコンピュータによってKGBが描いた(とクリアーヌが考えた)シナリオでは欠けていた一面を補うものとみなせる。すなわち、「宗教」を抑圧するか否かという二者択一において、ソヴィエトとその傀儡国家は抑圧する世界を選択した。それに対してクリアーヌは、抑圧しないという選択をして、思想体としての宗教の広大な広がりを見明らかになろうと努めたことになる。「空想科学政治」を読んでいた

人間が思想体に関する論述を読んだ場合、それはソヴィエトやルーマニアによって選り取られた二者択一に抗する選択肢の体系をクリアーヌが描こうとしたと解釈できたであろう。

宗教学と科学

——I. P. Culianu の場合——

佐々木 啓

近年、認知科学的宗教研究、すなわち「宗教」についての実験心理学的・進化生物学的などといわれる研究が流行りである。この認知科学的宗教研究の方向性が正しいとするならば、狭義の「宗教学」はそれに解消されてしまうかもしれない。最も「宗教学者」らしい「宗教学者」であるM. Eliadeの基本前提は、「宗教現象」なるものの固有性と、それを研究する際の方法の固有性の主張に他ならない。しかし、認知科学的宗教研究は、まさしく「宗教現象」なるものの固有性を剥奪するところから始まる。そのような認知科学的宗教研究に真に向かい対立するのが、Eliade & I. P. Culianu と呼んだ「宗教学者」たちである。

Culianu の研究者としての人生は二〇年ほどにしかないが、彼の方法論的変遷には看過できないものがある。例えば、Culianu 最後の学術書とも言える *The Tree of Gnosis* は、そのフランス語原典たる *Les gnosés dualistes d'Occident* に類繁に見られる人類学的議論がばっさり切り捨てられている。また Culianu は、彼の研究活動のごく初期に書いた文書

の中で、宗教研究には「動物行動学、生態学、社会学、精神分析、人類学」などの知見と方法を用いた学際的なアプローチが必要であると書いている。これだけ見ても、自他ともにEliadeの弟子であると任じるCulianuが、当初からどれほど師Eliadeに忠実であったのかということに疑問がわく。

EliadeとCulianuとの間では、彼等の交流のごく早い段階から「宗教学(history of religions)」における方法の問題が議論されていたことがわかるが、他方でEliadeは、方法論的模索を続けるCulianuを諫めているようにも見える。CulianuはEliadeの仕事を引き継ぎつつ、一九五〇〜六〇年代風の学問的にも時代遅れの姿から、新しい方法論的装いを凝らして解釈しなおし、さらに自らの研究テーマや方法を練り上げていった。

方法論の点でCulianuが決定的転回を見せるのは一九八六年(Eliadeの死)以降である。*The Tree of Gnosis* (1991)では、それまでには漠然としていた彼の方法論が明確な形で示された。そこには「時代の最先端の理論(構造主義、認知科学、物理学)」、しかも「成功裏に宗教研究に用いられた」ものが見えてくる。かくして、Culianuの歴史的な宗教現象の記述法は「形態力学 morphodynamics」となるのである。

もはやCulianuが単純な「非(あるいは反)還元論者」などではないことは明らかであり、そもそもそれがEliadeの同意するような宗教研究の方法であるかどうかも疑わしい。見よによつては、Culianuの主張は「ウルトラ還元主義」ではないか。Culianu「宗教学」は、彼自身も「認知的 cognitive」

という言葉を用いており、一見、認知科学的宗教研究と軌を一にするように見えるが、その内実は大きく異なる。Culianuの宗教研究には、当初から「進化生物学」的側面はない。むしろ彼の考えは、反進化論的と言うべきだろう。

さらに、Culianuの「形態力学」といったものは、「科学」すら説明できると主張する。彼が宗教の歴史的展開を説明する際に持ち出す“ideal objects”なるものも、「超(あるいは異)次元的」存在のように思われる。こうなると、宗教を「自然現象」と看做するような「認知的科学的」宗教研究からは、ますます遠ざかるものとなるだろう。そしてむしろ、このような仕方での「宗教現象」の説明は、Eliadeに向けられた“a science of religion based upon the mystery remains a mysterious science”という皮肉を、Culianu自身の身に引き寄せることになりかねない。そして、この点で、Eliadeの「忠実な弟子」というCulianuに貼られがちなレッテルが貼り直されるのかもしれない。

日本神話研究史の諸問題

松村 一男

日本神話研究の問題点を認識するための手段として研究史を検討している。その一環として今回は新しい研究動向の整理を試みる。最近研究が盛んな領域として、①考古学的知見の導入、②渡来人集団の貢献の再評価の二つを取り上げ、検討する。